

## 小学校における地理学習から

村岡 卓爾\*

### はじめに

これから発表内容は、今までの学習指導や近年携わっている補欠学習などで、社会科の地理的な学習を行った時の体験や感想が中心である。

小学校での学習の様子の一端として捉えていただき、今回のテーマ「中学校地理教育を考える」について、少しでも参考になればと思う。

### I. 授業時数と指導内容

平成元年の小学校学習指導要領の改訂で小学校低学年に「生活科」が新設され、教科としての社会科が無くなった。また今回の改訂で週5日制となり、さらに「総合的な学習の時間」が設定された。これに伴って全教科の指導内容が大幅に削減され、総授業時数<sup>1</sup>も減った。

その中で社会科の指導内容の一部は、発展学習や総合的な学習の時間との関連で学習可能となっているが、地理学習や地図の活用などの基本的な指導内容や授業時数は減少している。

指導内容は3割減となり、主として内容の精選と上学年や中学校へと移行された。小学校の改訂は中学校にも同じような条件であり、地理学習や地図の活用等にかなりの影響が出ていると考えられる。

また、年間授業時数も下記のように削減された。

3年 ( 70時間 ← 105時間)

4年 ( 85時間 ← 105時間)

5年 ( 90時間 ← 105時間)

6年 (100時間 ← 105時間)

このため、年間35週で割り切れず（他教科も同様）、通年の時間割が組めなくなった。

### II. 学年の指導内容・事項などから

#### 1. 低学年の生活科から

教科の学年目標として、「自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物とのかかわりに関心をもち、それらに愛着をもつことができるようになるとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動できるようになる。」と表記されている。

社会事象については、人やものとの関わりがより一層重視され、校外での活動を積極的に取り入れることを強調しているが、基礎・基本的な地理や地図に関する学習内容は薄くなっている。たとえば、以下の具体的な例を挙げることができる。

- ① 1年の通学路の安全、公園の利用では、具体的な活動や体験が中心で場所・位置関係などの初步的な地理学習の扱いは少ない。
- ② 2年のべんり地図作りでは、「もの・人・ことがら」との関わりで得たことを提示された簡単な地図などに絵やカードを貼り付けたり書き込んだりして表すなどの学習を行っている。
- ③ 社会科の時には、「学校から自分の家まで」を、時には何枚も紙をつなげて描いたり、4～5m 大の簡単な校区絵地図に表したりした。これを使って学校と自分や友達の家との位置関係などを初步的な地図学習をしたものである。絵地図作りは、3年に移行している。

#### 2. 中学年の学習から

目標が2学年まとめて示され、理解に関する目標の中で「地域の地理的環境」として総括的な表現で示されている。また、4年生から使用される地図帳は、各学年の目標(3)に示され、日常的に活用し親しみをもたせることで、知識や能力の育

\*札幌市立豊園小学校

成を目指している。こうした点について、以下のことことが指摘できる。

- ① 3年の「校区探検」では、総合的な学習の時間の「地域学習」と関連づけて指導時数を弾力的に運用しているところが多く見られる。校区探検の単元始め、校外学習で全員が並んで出発する。学習支援で児童に付き添った時には、地図上で自分が今何処にいるか分からぬ児童がかなり見られた。地図の基本的な使い方や屋上観察などを通した十分な事前指導が大切である。また、その後の絵地図作りでは、バス停や駅などを入れさせたい。それによって、隣接地域への広がりや他地域との関連や興味・関心を意識化させることができるのでないだろうか。
- ② 4年生での「地図帳を使いこなそう」では、単元のオリエンテーションに位置づけられているが、指導にかける時数は少ない(1時間)。基本的な使い方や今後の利用の意欲づけを図ることを考えると、もっと指導時間を確保する必要があろう。
- ③ 4年「北海道の地形やくらしのようす」では、地形や交通調べは2時間程度であり、今後の学習に働く基礎的な知識としての定着は十分とは言えないと思う。
- ④ いろいろな単元を学んだ子ども達が、4年生を終えた時、自分たちの住む北海道のことをどの程度理解し、伝えることができるのだろうか。

### 3. 高学年の学習から

理解目標にある「我が国の国土の様子」については、国土の位置、地形や気候の概要、気候条件から見て特色ある地域の人々の生活、森林資源の働きを取り上げ、国土の環境と人々の生活や産業との関連を理解できるようにすることとねらい定めているが、以下のような問題点を挙げができる。

- ① 5年「わたしたちの住む国土」は3時間程度の扱いとなっており、国土に関わる様子や特徴及び基礎的知識などは十分に理解・定着しているとは言い難い。
- ② 都道府県の名称や位置の指導時数は年度当初のオリエンテーションで1~2時間の扱いであ

り、興味や関心を意識させる程度となっている。また、国土のようすなどが学年末の単元になっているため、地名が出てても何処にあるのかはつきりせず、地図帳での確認にも時間がかかる。

- ③ 6年生での歴史学習で、地名が出てきてもピンとこない。地図帳の利用はほとんど見られない所である。この内容の扱いは、中学校に移行され、そこで扱われている。
- ④ 食料生産を支える人々では、「米作り」を調べている児童が圧倒的で、生産地、生産量、なぜ稻作なのかなどを課題としている子どもは少ない。
- ⑤ 産業学習の内容の取り扱い方を見ると、地図の活用を図る場面が少なくなっている感じる。
- ⑥ 確かに人との関わりが重視される所であるが、日本のおおよその状況をどのように学習させるのか気になる所である。

### III. 小学校の地理学習全般を通して

まず、基礎・基本の重視の視点から、以下の点を指摘できる。

- ① 地域や地方・国土（都道府県や地方）などの主要な地名や位置、地形や気候等は、小学校でも地理学習の基礎・基本だと思う。テレビなどで色々な地域の名称などを目にしているが、一過性のもので与えられるものであるため、確かな知識として身に付いていない。必要なことを学ばせないと、若者の知識離れの更なる要因になるのではないだろうか。
  - ② 指導内容を考えた単元の位置づけを考える必要があろう。学習を進める手だてや広い視野からの課題作り、その解決の手だてにさらに生かされると思う。
- 次に、地図指導は、3年から6年まで有効活用できるようにと示されているが、以下のような問題点がある。
- ① 地図指導の基礎は、低学年の生活科から始まっている。3年生からの新しい教科としての社会科ではなく、継続したものとしての意識をもっと大切にしたい。
  - ② 白地図などをを使った学習は、どの学年でも指導時間が少ないので、彩色・記入だけで精一杯

の現状である。

③ 子どもが地図に親しむ指導法の工夫を図るとともに、地域の白地図などがいつでも自由に使えるように用意するなど環境づくりにも力を入れたいものである。

また、地図・地図帳の活用が減っているのも、問題である。

① 地図を使った自由学習や遊びが減っており、地図自慢の子どもも目立たなくなった。

② 地図を読む、地図から課題を見つける、解決する学習が少なくなった。調べる手だてとしてインターネットが人気を集め、資料に続いての地図帳となり、その位置づけはどんどん後退している感がする。

③ 地図上の位置の表し方は中学校で指導するため、小学校では探すのが一苦労である。そこで、「どこでも住所がある」とし、緯線を経線を丁目と表現して簡単な指導をした。

④ 日常的に地図帳が使用されず、使用時は指示のもとに棚から出して一斉に使っているクラスもあった。

一方、総合的な学習の時間との関連がより大きくなっている。評価すべき点としては、以下の通りである。

① 地図の基本的な知識や見方などは、主として教科で指導しており、総合的な学習の時間の教材として発展学習や現地学習などが設定され、この活動野中で地図が活用されている。

② 地域、環境、情報、国際理解、福祉に関わる学習では、地図の利用や活用がその活動の深まりに大きく生かされてきている。望ましい傾向である。

#### IV. 地理学習に関わることから

##### 1. 現地学習などから

現場学習などから指摘できることは、次のような点である。現地学習や修学旅行の際にルートマップが見あたらないことがある。目的地までの移動の間は、レクリエーション的な時間となっていることが多い、目的地では、体験的な内容が中心である。私の考えでは、たとえば、6年生の修学旅行では、小樽の展望台からの眺望もぜひ取り入れたい。また、3年の現地学習や登山遠足での

藻岩山散策では、水準点も見せておきたい。

##### 2. 地図帳について

地図帳については、以下のことを提案したい。

① もっと子どもに親しめる地図を増やして欲しい。4年生の総合的な学習「国際理解」の中で、イギリスの地図に民族衣装の子どもが描かれた世界地図が紹介された。子ども達は喜んで何処の国か調べていた。

② 大西洋を中心の地図の掲載を地図帳に載せてはどうか。日本や世界についての見方や考え方方が広がるのではないか。また、中学では「極東」の意味も理解できよう。

③ 中学校の地図帳の改訂で発展学習に関わる記述部分がより多くなることである。小学校の地図帳にも学年を渡るものをぜひ編集して欲しいものである。

##### 3. 夏・冬休み中の自由研究から

夏休みや冬休みの自由研究では、地図などを生かした作品は、社会科よりも総合的な学習に関連したものが多くなっており、社会科の出品数が少なくなる傾向を示している。実情からやむをえないのだろうか。

##### 4. 情報教育との関わりから

情報機器の習熟と相まって、地域や産業学習などのインターネットを使った調べ学習が盛んになっている。そのままプリントアウトし、切り貼りただけのまとめも多い。

##### 5. インターネットのテレビ交流から

5年生が福岡県の地方の学校との交流を行った。相手からの質問の一部を紹介しよう。

- ・雪は一年間にどれだけ降るのですか。
- ・流水とは、どんなものですか。
- ・いつも毛ガニを食べているのですか。
- ・冬は、野菜を食べているのですか。
- ・酪農をやっているのは何人ですか。etc.

子ども達自身も分からないうちが多く、資料も少なかったこともあります。インターネットを検索し一生懸命調べていた。冬の野菜が日本各地や外国からも運ばれてきていることを調査し発表したり

もした。その中で、当地のキウイが80円前後で売られていることを知らせると、その価格に驚いていた。

地域活動が広く全国と繋がりのあることを学ぶ貴重な学習体験をすることができたと思う。

また、降雪量が約5mの返答を用意していたので、積雪量のビデオと併せて紹介するよう指導した。

このテレビ交流は急きょ決まったもので、北国に対する興味や疑問が先行し、札幌の事前学習が不足したために、上記のような質問が集中したと思われるが、今の学習指導のあり方の一端を見るような気がした。

テレビ交流は、画面を通して直接体験できる効果的な手段であり、今後大いに活用したいものであるが、「自分たちの常識は、他の地域では非常識」ということを痛感させられた。

## V. この頃の動きの中から

最近のある調査から、都道府県の認識度が紹介されていた。北海道は全般的に高い値が出されていたが、東京の位置ですら、白地図に書き入れてもらった結果は、決して高いものではなかった。

また、ある民族のテレビ番組で若者にアメリカやイギリス、中国などの主要国家の位置を尋ねたら、かなり曖昧な答えであった。放送内容をそのまま鵜呑みにできないが、気になる傾向である。

近年はカーナビゲーションの普及が進み、これを利用する人が多くなってきた。現在地から目的地まで詳細に案内してくれるため、地図や地図帳を広げる人がさらに少なくなってくると思う。

地図は、親しみば親しむほど多くの知識を与えてくれるし、新たな発見もできる。何よりも夢を大きく膨らませてくれる。

一方、教育行政の立場から愛国心の具体的な姿や行動目標が打ち出され、より一層の指導の強化が謳われている。また、国際理解教育の充実も併せて求められている。

自分達が育まれている環境や生活の場としての地域、地方、国土の様子・特徴や産業活動などを低学年から体験などを通して学ぶことは、単なる心情としての愛国心ではなく、自らが醸し出す眞の愛国心を育て、広く世界に目を向けていく国際

理解教育の基礎を養う上で重要なことであると考える。

このような現況をしっかりと捉え、地理や地図好きの子ども達をもっと増やしていく魅力のある楽しい学習づくりに努めたいと思う。そのためにもっと自らの視野を広げ、知識や体験を増やし、小・中学校の授業研究会などにも積極的に参加し、連携をより密にして学習指導の充実を図っていきたいと思う。

## おわりに

指導内容・事項は精選されたといえども、幅広く膨大である。地域、地方、国内の様子や社会事象・人々の生活なども刻々と変化している。多くの先生たちが、時数の減少や、研修の時間の確保が難しい状況の中で、よりよい授業を目指して実践や研修に励んでいる。これらの努力が、子ども達の「生きる力」の育成に大きく寄与するものと思う。

なお、この文はミニシンポジウム「中学校地理教育を考える」で発表させていただいたことに、最近の動きについての感想などを追加させていただいております。末筆ながら、この様な有意義な研修の機会を与えてくださった北海道地理学会並びに会員の皆様に深く感謝いたします。

## 注

- 1時間は、1コマで45分を表す。

## 参考資料

文部省 (1999) : 『小学校学習指導要領解説』

札幌市教育委員会 (2001) : 『札幌市小学校教育課程編成の手引き』